

音楽経験とパーソナリティに関する一考察

Relationship between Musical Experience and Personality

渡辺 恭子

Kyoko WATANABE

1. 緒言

本邦では、音楽とパーソナリティの関係が様々に論じられてきた。先行研究を大別すると、第一は、音楽聴取者のパーソナリティ傾向が、音楽聴取によって起こる心理学的・生理学的変化にどのような影響を及ぼすのかという観点から検討されてきたと考えられる。例えば、栗野（2009）らはパーソナリティ特性が音楽聴取による状態不安の変化にどのような影響を及ぼすのかについて検討している。松井（2005）は、パーソナリティ傾向が低状態不安の群は音楽聴取によってリラクゼーションがもたらされやすいと報告している。これらの先行研究から、パーソナリティ傾向によって音楽聴取による変化に違いがあるのではないかと思われる。

第二は、パーソナリティ傾向によって、音楽嗜好性に違いが認められるのではないかという論点から検討されてきたと推察される。例えば、Hansen（1991）はヘヴィメタ愛好者とパンクロック愛好者のパーソナリティ傾向について報告しているし、佐藤（1996）はパーソナリティの刺激希求性と音楽嗜好性の関連について検討している。さらに、新山（2003）はパーソナリティの特徴が音楽

に対する印象や評価にどのように影響するか検討している。加えて、貫（2004）はYG検査を用いてパーソナリティ傾向と音楽嗜好性の関連を検討しており、東條（2008）らも5因子検査を用いて音楽嗜好性との関連を検討している。これらの先行研究から、パーソナリティ傾向と音楽嗜好性には何らかの関連があると推察される。

一方、音楽経験が音楽聴取によって起こる心理学的・生理学的変化にどのように影響するか検討した先行研究がある。例えば、山本（1999）は音楽聴取による気分変化について、音楽を専門に学んでいるか否かによる差異はないと報告している。一方、西村（2003）は音楽聴取による生理学的変化は音楽経験のない人に強く認められると報告している。作田（2003）も音楽聴取時の生理学的変化は音楽経験の短い群において大きく出るという西村と類似した報告を行っている。しかし、吉岡（2004）の研究では、東大式エゴグラムを用いた検討の結果、音楽経験を有する群の方が音楽による心理的反応が効果的に惹起されると報告している。これらの先行研究から、音楽経験と音楽聴取による変化の関連については意見が分かれていると推察される。

前述の先行研究を検討した結果、音楽聴取者のパーソナリティ傾向が心理学的・生理学的変化に影響すること、パーソナリティ傾向と音楽嗜好性に何らかの関連があること、音楽経験と音楽聴取による心理学的・生理学的変化にも関連があるであろう事が仮定できる。つまり、パーソナリティ傾向・音楽嗜好性・音楽経験の有無や質・音楽聴取による心理学的生理学的変化という4つのベクトルが互いに複雑に関連を持っているのではないかという仮説が成り立つ (figure1)。

しかし、これまで音楽経験とパーソナリティ傾向との間にどのような因果関係があるのかについては検討されることが少なかったと思われる。なお、先行研究を検討したところ、パーソナリティと音楽経験をキーワードとする論文はほとんど見受けられなかった (CiNii, J-Dreamの検索結果より)。そこで、本研究では、自己成長エゴグラムを用いてパーソナリティ傾向を調査し、音楽経験の期間や頻度、音楽経験の活動形態などの因果関係を検討することを目的として行った。

2. 対象と方法

2.1 対象

対象はA大学の3学部5学科の学生で研究に同意した148名である。被験者の性別は全員女性で、平均年齢は18.57歳 (SD=0.44歳) であった。研究に際しては、倫理的配慮として、これらの被験者全員に対し調査の意図や個人情報保護について説明し、同意した被験者には同意書に署名を求めた。さらに、収集した評価データに関しては、個人を識別する情報を取り除き新たに番号を付して連結不可能な匿名化を行った。また、研究に使用するデータは多数例をまとめて統計的に処理し、データの解析結果のみを取り扱った。

2.2 質問紙

調査に用いた質問紙は二部に分かれており、第1部はパーソナリティ傾向を調査するため、芦原らによって改訂された自己成長エゴグラム (Self Grow-up Egogram) 1991年改訂版を使用して作成した (芦原1993)。エゴグラムはBern, E.の交流分析の理論を元に作成されている。交流分析は精神分析理論を基礎に、行動論およびニューサイコロジーの理論・技法を取り入れて構築されたパーソナ

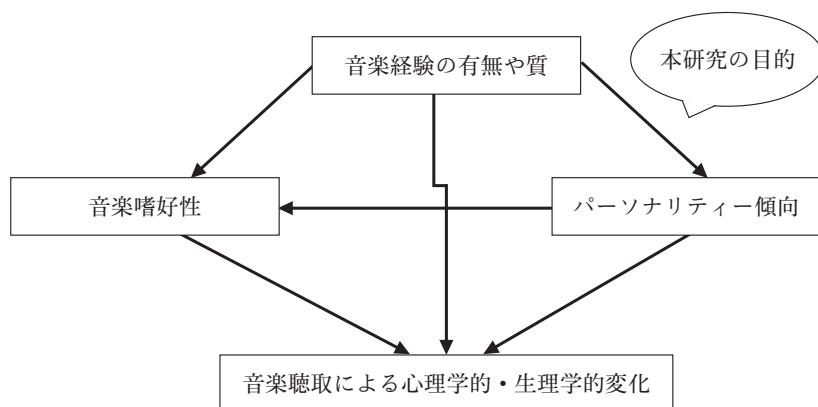


figure1 研究の仮説モデル

リティー理論で、主に自我状態に着目している（氏原他 2001）。交流分析の構造論では、自我状態が「親」の自我状態(;P)、「大人」の自我状態(;A)、「子ども」の自我状態(;C)の3つからなっている。さらに、この「親(P)」「大人(A)」「子ども(C)」つまりPACの自我状態が「批判的な親(;CP)」「養護的な親(;NP)」「大人(;A)」「自由奔放な子ども(;FC)」「順応した子ども(;AC)」に機能的に細分化されている。そして、それぞれを数量として表したものがエゴグラムある。エゴグラムは経験がパーソナリティや行動に与える影響を検討するときにパーソナリティ尺度として頻回に用いられてきた。例えば、宮澤（2006）は保育士経験年数によって、パーソナリティ傾向に有意差があるかどうか検討している。さらに、豊田（2010）はエゴグラムのNPが随伴経験の量によって規定されるかどうかを検討している。この他にも多数の報告がある。このような背景から、本研究ではエゴグラムを用いて、音楽経験とパーソナリティ傾向の因果関係を検討することとした。なお、日本版のエゴグラムとしては東大式エゴグラムTEG-IIが有名だが、今回は被験者の負担を考慮して、項目数が若干少ない自己成長エゴグラムを使用した。

自己成長エゴグラム（Self Grow-up Egogram）1991年改訂版では、パーソナリティにおける「批判的な親」「養護的な親」「大人」「自由奔放な子ども」「順応した子ども」の傾向を数量化することが出来る。自己成長エゴグラムでは、前述の5つの自我状態を示す10項目が示されており、合計50項目の質問からなっている。回答は、「はい(○)」、「どちらでもない(△)」、「いいえ(×)」の3件法によって求めることになっているので、本研究でもそれに準じ点数化した。また、本研究ではオリジナルの因子で分析した。

ここで、エゴグラムで測定できる各自我状態の特徴を簡単に示す（東京大学医学部心療内科TEG研究会 2011）。「CP」が高い場合、それが良い面として表れれば責任感が強く秩序を守り信念を貫くという一方、短所として表れた場合は権威的で支配的で頑固であるという側面が認められるとされている。「NP」が高い場合、それが良い面として表れれば、思いやりがあり人に共感でき世話好きである一方、悪い面として表れれば人に尽くしすぎたり同情しすぎるといった側面があるとされている。「A」が高い場合、良い面として表れた場合には理性的で論理的、冷静沈着という面が認められる。一方で、ユーモアに欠ける、打算的といった短所として表れることもあるとされている。「FC」が高い場合、創造性が豊かで直感的に物事を捉えることが出来、積極的であるという面がある。一方で、自己中心的・感情的・衝動的といった側面を持っている。「AC」が高い場合、良い面として出た場合には協調性があり我慢強く従順という側面があるが、悪い面として出た場合は、依存心が強く他人の目が気になり人のいいなりになることがあるとされている。

質問紙の第二部は音楽経験に関する質問項目からなっており、学校での音楽の授業以外での音楽活動の有無、頻度（週何回）、音楽活動の種類を尋ねた。音楽活動の種類としては鍵盤楽器・弦楽器・金管楽器・声楽と、吹奏楽・バンドなどに大きく分かれており、質問に答えやすくするため、具体的な楽器などを記載した。さらに、集団音楽活動か個人音楽活動かを尋ねた。加えて、音楽活動の時期を質問した。

2.3 分析方法

上記の質問紙の回答のデーターを用いて、音楽活動経験の有無によってエゴグラムの各

点数に差があるか、対応なしの t 検定を行った。また、頻度とエゴグラムの各点数に相関があるか検討した。さらに、音楽活動の形態（集団か個人かあるいは両方か）によってエゴグラムの各点数に差があるか、一元配置の分散分析を行った。加えて、音楽活動の種類ごとにその経験の有無によってエゴグラムの各点数に差があるか対応なしの t 検定を行った。また、音楽活動時期によってエゴグラムの点数に差があるか対応なしの t 検定を行った。

加えて、音楽活動経験・音楽活動の種類・音楽活動の形態（集団か個人か）・音楽活動の時期と、エゴグラムの各因子（各自我状態）の点数において因果関係があるか否かを、Amos を用いてパス解析を行い、検討した。

3. 結果

基礎的な統計結果から報告する。

まず、エゴグラムの尺度の構成を検討するため、エゴグラム下位尺度ごとにCronbachの α 係数を算出した。その結果、CPが α 係数.730, NPが α 係数.798, Aが α 係数.775, FCが α 係数.748, ACが α 係数.829となり、ある一定の内の一貫性が確認された。

次に、音楽経験の有無による差の検討を行った。学校での音楽の授業以外の音楽経験ありと回答したのは110名、音楽経験なしと回答したのは37名であった。音楽経験を有する群

とない群を対応なしの t 検定で比較した結果、エゴグラムのFCにおいて有意の傾向 ($t=1.96, p=.052$) が認められた。詳細はtable1に記載する。

また、音楽経験の頻度は平均週2.5日 (SD 2.5日) であった。音楽経験の頻度とエゴグ

table1 音楽経験の有無によるエゴグラムの比較結果

	経験あり (n=110)	経験なし (n=37)	t 値
エゴグラムCP	14.35	13.95	.61
エゴグラムNP	14.23	13.11	1.48
エゴグラムA	12.05	11.30	.93
エゴグラムFC	15.04	13.68	1.96†
エゴグラムAC	13.72	13.70	.02

† $p<.10$

ラムとの相関を検討した結果、音楽経験の頻度とエゴグラムのNPにおいて有意な相関 ($r=.226, p=.006$) が認められた。

活動形態による分散分析の結果 (table2)、エゴグラムのNPで有意の傾向が認められた ($F(3,143)=2.66, p=.05$)。

音楽活動の種類ごとに経験の有無によって差があるか否かについては (table3)、鍵盤楽器におけるエゴグラムのCP ($t=1.69, p=.093$)、弦楽器におけるエゴグラムのA ($t=-2.02, p=.050$)、声楽におけるエゴグラムのNP ($t=2.54, p=.012$)、バンドにおけるエゴグラムのFC ($t=2.15, p=.033$) とNP ($t=1.80, p=.074$) で有意差または有意の傾向が

table2 音楽活動の形態によるエゴグラムの比較

	経験なし (n=37)	個人経験あり (n=45)	集団経験あり (n=40)	個人と集団両方 (n=24)	F 値
エゴグラムCP	14.00	14.51	14.88	13.08	1.53
エゴグラムNP	13.24	13.16	14.55	15.54	2.66†
エゴグラムA	11.37	11.73	12.25	12.25	.35
エゴグラムFC	13.71	14.51	15.70	14.92	2.01
エゴグラムAC	13.71	13.80	14.05	13.00	.27

† $p<.10$

table3 音楽活動の種類によるエゴグラムの比較結果

	鍵盤楽器			弦楽器			金管楽器		
	経験あり (n=83)	経験なし (n=64)	t 値	経験あり (n=20)	経験なし (n=126)	t 値	経験あり (n=20)	経験なし (n=127)	t 値
エゴグラムCP	14.66	13.70	1.69 †	13.15	14.44	-1.57	14.80	14.16	.78
エゴグラムNP	14.02	13.84	.27	13.75	14.01	-.27	14.30	13.89	.43
エゴグラムA	12.25	11.36	1.26	10.65	12.11	-2.02*	12.80	11.72	1.05
エゴグラムFC	14.80	14.56	.38	15.75	14.56	1.35	14.70	14.69	.01
エゴグラムAC	14.02	13.31	.94	13.20	13.78	-.52	13.55	13.74	-.17

	声楽			吹奏楽			バンド		
	経験あり (n=25)	経験なし (n=122)	t 値	経験あり (n=31)	経験なし (n=116)	t 値	経験あり (n=19)	経験なし (n=128)	t 値
エゴグラムCP	14.52	14.19	.44	14.71	14.12	.85	14.00	14.28	-.33
エゴグラムNP	15.76	13.57	2.54*	14.52	13.79	.90	15.47	13.72	1.80 †
エゴグラムA	12.32	11.77	.58	12.97	11.57	1.62	12.16	11.82	.32
エゴグラムFC	15.64	14.50	1.42	14.71	14.69	.03	16.37	14.45	2.15*
エゴグラムAC	14.96	13.46	1.51	13.55	13.76	-.23	13.47	13.75	-.25

† p<.10 *p<.05

table4 各活動時期の音楽経験の有無による比較結果

	幼児期			小学校			中学校		
	経験あり (n=59)	経験なし (n=88)	t 値	経験あり (n=70)	経験なし (n=59)	t 値	経験あり (n=75)	経験なし (n=72)	t 値
エゴグラムCP	14.44	14.11	.56	14.43	13.63	1.33	14.61	13.86	1.33
エゴグラムNP	14.78	13.39	2.10*	14.21	13.20	1.45	14.35	13.53	1.25
エゴグラムA	12.42	11.49	1.30	12.70	10.98	2.40*	12.47	11.24	1.75 †
エゴグラムFC	14.90	14.56	.55	14.74	14.24	.77	14.64	14.75	-.18
エゴグラムAC	14.20	13.39	1.07	13.69	13.69	-.01	13.33	14.11	-1.04

	高等学校			大学		
	経験あり (n=58)	経験なし (n=89)	t 値	経験あり (n=10)	経験なし (n=137)	t 値
エゴグラムCP	14.78	13.90	1.52	14.10	14.26	-.14
エゴグラムNP	15.00	13.26	2.64**	17.50	13.69	3.00**
エゴグラムA	12.07	11.73	.47	14.50	11.67	2.04*
エゴグラムFC	14.62	14.74	-.19	17.10	14.52	2.17*
エゴグラムAC	13.53	13.83	-.39	13.70	13.72	-.01

**p<.01

*p<.05

† p<.10

認められた。

さらに、幼児期・小学校・中学校・高等学校・大学の各時期において音楽経験を有する群とない群を対応なしのt検定で比較した結

果 (table4), 幼児期のNP ($t=2.10$, $p=.038$), 小学校のA ($t=2.40$, $p=.018$), 高等学校のNP ($t=2.64$, $p=.009$), 大学のNP ($t=3.00$, $p=.003$) とA ($t=2.04$, $p=.044$) とFC ($t=$

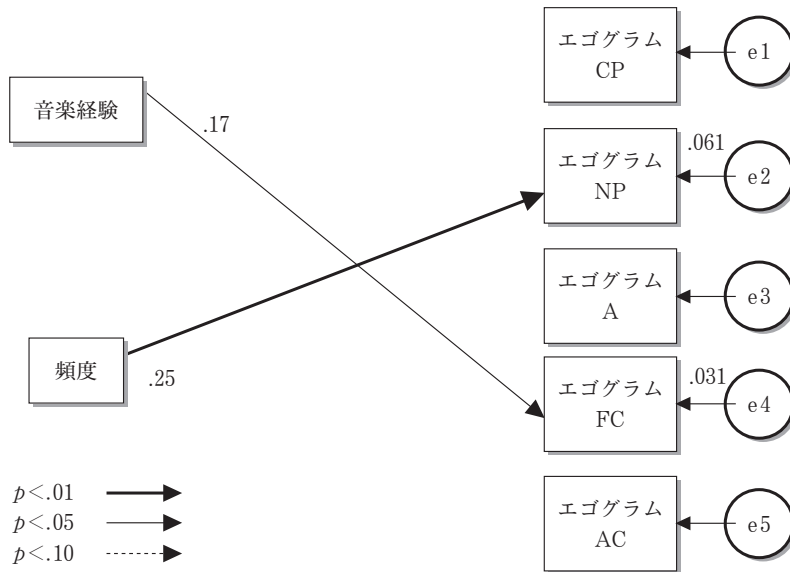


figure2 音楽経験とパーソナリティー傾向のパス解析結果

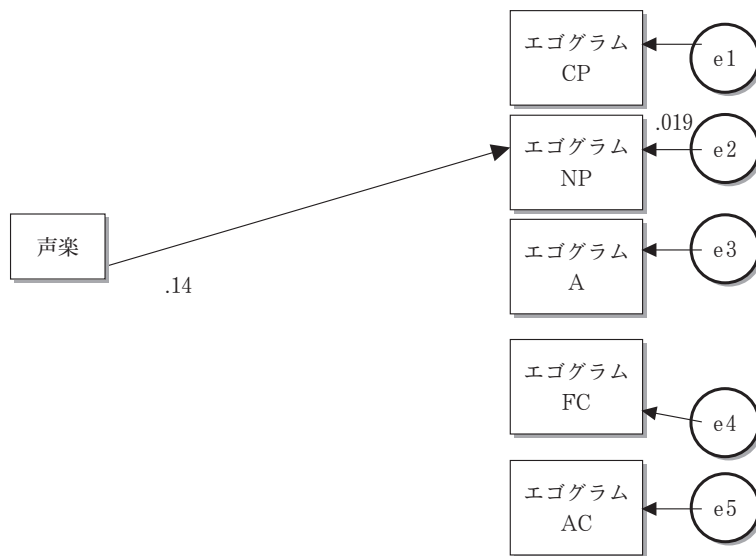


figure3 音楽活動の種類とパーソナリティー傾向のパス解析結果

2.17, $p = .032$)において有意差が認められた。また、中学校のA ($t = 1.75$, $p = .082$)において有意の傾向が認められた。

上記の分析結果をもとにパス解析を行った。第一に、音楽経験・頻度を独立変数、エゴグラムを従属変数としてパス解析を行った結果

(figure2), 音楽経験からエゴグラムのFCに有意なパスが認められた。また、音楽経験の頻度からエゴグラムのNPに有意なパスが認められた。なお、モデル適合度はGFI値が.984, NFI値が.959, CFI値が.997で高いモデル適合度が得られた。

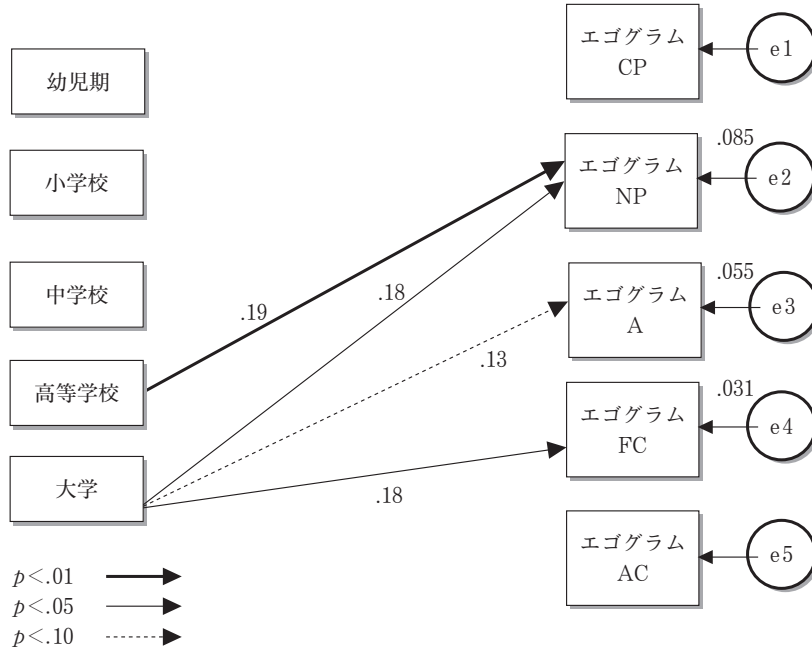


figure4 音楽活動の時期とパーソナリティー傾向の関連パス解析結果

第二に、集団か個人の音楽活動か、集団音楽活動の種類を独立変数、エゴグラムを従属変数としてパス解析を行った結果、集団か個人かによる因果関係は認められなかった。

第三に、音楽活動の種類の鍵盤楽器、弦楽器、声楽、バンドを独立変数、エゴグラムを説明変数にパス解析を行った結果、声楽からエゴグラムのNPに有意なパス、バンドから有意の傾向のパスが認められた。しかし、一定のモデル適合度が得られなかった。そこで、声楽のみを独立変数として再度パス解析を行った結果、モデル適合度はNFI値が.960、CFI値が.988で高いモデル適合度が得られた (figure3)。

第四に、音楽活動時期を独立変数、エゴグラムを説明変数としてパス解析を行った結果、高校時代に音楽活動を行っていた場合に、エゴグラムのNPに有意なパスが認められた (figure4)。さらに、大学時代に音楽活動を

行っていた場合に、エゴグラムのNP、FCに有意なパス、エゴグラムのAに有意の傾向のパスが認められた。なお、モデル適合度はGFI値が.971、NFI値が.941、CFI値が.978であり、高いモデル適合度が得られた。

4. 考察

ここでは、パス解析の結果多くの有意なパスが認められたFCとNPを中心に考察することとする。

4.1 音楽経験がFCに及ぼす影響に関する考察

上記の結果より、音楽経験とエゴグラムのFCに因果関係が認められている事が明示された。さらに、音楽活動時期の大学とFCにも因果関係が認められている。FCの得点の高さはエゴグラムの中で規定されている創造性の豊かさや直感的に物ごとを捉える傾向や積極性を示す。つまり、人生において楽しみ

を見つれたり、新しい環境において新しい価値観を見出して、その環境に適応していく力であると思われる。

このような意味でのパーソナリティーにおけるFCは、当然ながら、愛着の対象から（具体的には親から）どのような養育を受けたのかといった生育歴に大きな影響を受けるであろう。また、学校や塾、習い事などの集団の場で、どのような対人関係を持ちどのような影響を受けたかといった生活歴によっても大きく左右されよう。さらに、どのような教育を受けたかといった教育歴も関係すると思われる。このように、FCという観点からだけでもパーソナリティーが形作られる背景には、様々な要因が絡み合っていると推察される。そのような中で、今回、量的研究によって、FCに影響を与える要因の一つとして音楽経験があると示されたことは一考に値するのではないだろうか。

ところで、矢野（2010）は小学生の自我状態の特徴に関する研究の結果として、FCが他の尺度よりも高くFC優位型を示すと報告している。本研究では、音楽活動時期の大学とFCに因果関係が認められている。しかし、小学生の頃に高かったFCが成長するにつれて低下していくのを音楽活動がとどめる役割を果たしたのか、それとも音楽活動を続けることによって向上したのかについては、今回の研究では検証できていない。後述の今後の課題でも触れるが、これらの縦断的变化に関する検討が、今後必要になるとと思われる。

なお、筆者等の研究で、育児ストレスと自我状態の関連を調査した結果、育児ストレスを感じにくいパーソナリティー傾向としてFCが見出されている。これはFCの創造性が柔軟な育児を可能にしていると考えられる。この事を考え合わせると、音楽経験を積み重ねることによってFCを高め、柔軟性を養い、

育児ストレスの耐性を高める一助となることが出来る可能性もあるかもしれない。なお、我々の研究によって、FCが高いと音楽聴取によるリラックス効果が高いことも見出されている。今後、ストレスとFC、音楽経験の関連についてさらに検討をする必要があると考えられる。

4.2 音楽経験がNPに及ぼす影響に関する考察

音楽経験の頻度と音楽活動の時期の高校・大学とエゴグラム NPにも因果関係が認められた。この事から、音楽活動の頻度が高いほど、思いやりや親切心が高くなっていると考えられる。さらに共感能力にも影響を与えていると考えられる。思いやりや親切心は、他者の気持ちや考えを推し量ることが必須であり、そこには前提として共感能力が必要になってくると考えられる。そこで、ここでは共感能力に論点を絞って考察してみることとする。

共感能力も、考察の4.1で示した通り、生育歴や生活歴、教育歴など様々な要因が絡み合って培われるものであると推察される。それを大前提とした上で、本研究の結果について、下記のように考察した。

音楽はある種の非言語的コミュニケーションであるといわれている。音楽活動には、例えば、テンポを聞いて合わせる、指導者の音楽性を読み取りそれに合わせるといった行為が自然と含まれていると考えられる。従って、音楽活動を頻回に行うことによって非言語的なコミュニケーションスキルが向上し、共感能力を向上させることが出来る可能性があるのではないだろうか。なお、音楽活動によるコミュニケーションスキルの向上については、渡辺（2012）の統合失調症を対象とした研究や、山下（1996）の研究でも示されている。

ところで、音楽活動の中でも、特に声楽か

らNPにパスが認められた。このことから歌唱活動がNPに影響を与えていると推察される。歌唱では自分自身の声を用いられる。声は他者との意思疎通や共有・共感に必要なものであることを考えると、自身の声というもっともプリミティブなコミュニケーション手段を介した音楽活動が共感能力に影響している可能性もあるのではないだろうか。さらに、集団の歌唱活動について、青（2010）は「場を共有するだけで、共に歌える歌がそこにあるだけで、楽器としての身体同士は共鳴・共振をすでに行っているのである。無意識のレベルで共感や違和感を身体同士の共鳴の中で得るのが歌なのであり、……」と述べている。このことから、歌唱活動が共感能力に影響している可能性も類推される。加えて、歌唱活動が他の音楽活動と比べて特徴的なのは、歌詞があるということであろう。岩倉（2010）は、151名を対象とした調査において、同じ内容であっても、文章だけよりも歌詞にして歌唱した方が、共感的理解が促されたと報告している。渡辺（1998）も事例研究を通して、同様の考察を得ている。これらより、歌唱活動はNPに影響を与えている可能性があるのではないかと推察される。

4.3 今後の課題

今後の課題として、本調査は女性のみ、しかもA大学のみを対象としたものであり、今後男性を含めた検討が必要であると考えられる。さらに、学校教育以外での音楽経験ありとした対象者が多く認められたため、データに偏りがある可能性も考えられるので、今後、別の群での調査も必要である。また、対象人数の課題も残っている。例えば、音楽活動の種類によっては経験のある人数が少なかったり、音楽活動の時期においても大学生の経験人数が $n=10$ と少ない。この対象

人数でパス解析を行う事が妥当かという問題があると考えられる。加えて、本研究の対象者はすべて大学生である。特にパーソナリティー傾向は思春期以降に固まってくるという説もあるので、幼児・学童など思春期以前の対象者のパーソナリティーに与える影響については今回検討できていない可能性がある。その証拠に、音楽経験の時期について見てみると、幼児期・小学校・中学校はエゴグラムの中の自我とも因果関係が認められなかった。今後、この時期の対象者に関する音楽経験の与える影響について検討する方法を模索していく必要があると考えられる。また、前述したように我々の先行研究において、音楽聴取による変化とパーソナリティー傾向の関連が示唆されている。今後、この点についても検討していく事が必要である。

5. 結語

本研究は音楽経験とパーソナリティー傾向との間にどのような因果関係があるのかについて検討することを目的として行われた。具体的には、自己成長エゴグラムを用いてパーソナリティー傾向を調査し、音楽経験の期間や頻度、音楽経験の活動形態などとの因果関係を考察した。

方法は、音楽経験・経験した音楽活動の種類（楽器等）・音楽活動時期・集団音楽活動か個人音楽活動かなどを独立変数とし、自己成長エゴグラムの各因子の得点を従属変数としてパス解析を実施した。

その結果、主に、音楽経験や頻度・活動時期の大学とエゴグラムのFCに因果関係が認められた。さらに、音楽経験の頻度・活動時期の高校と大学・声楽とエゴグラムのNPに因果関係が認められた。このことから、音楽経験は創造性や積極性に影響を与える可能性があると考えられた。さらに、音楽活動を頻回

に行うことによって共感能力に影響を与えることが出来るのではないかとの考察が得られた。

謝辞

本論文作成において、金城学院大学南曜子教授からご指導を頂きました。また、小牧養護学校笠松千祐氏にもご助力いただきました。ここに深謝申し上げます。

また、本論文は平成25年3月23日に行われた日本音楽教育学会東海地区例会における発表を加筆訂正したものです。例会において様々なご示唆を頂きましたことに心よりお礼申し上げます。

引用・参考文献

- 青 拓美 (2010) 「集団歌唱療法を考える」『日本音楽療法学会誌』第10号, pp.41-46.
- 芦原 睦 (1993) 『心身医学おもしろレクチャー, 心身医学と臨床心理学の接点』株式会社チーム医療, pp.66-78.
- 芦原 睦 (2010) 「私的交流分析史, 自己成長エゴグラム, 対処行動エゴグラム, ゲーム再分類など」『交流分析研究』第35号, pp.66-73.
- 岩倉政城 (2010) 「講義に歌を用いることによる共感的理解の深まりとその教育効果」『尚絅学院大学紀要』第60号, pp.147-156.
- 氏原 寛, 小川捷之, 近藤邦夫他編 (2001) 『カウンセリング辞典』ミネルヴァ書房, pp.207-209.
- 栗野理恵子, 伊藤義美 (2009) 「パーソナリティ特性と聴取音楽の感情価およびその好み音楽聴取後の感情状態に及ぼす影響」『日本音楽療法学会誌』第9号, pp.70-81.
- 作田由美子, 奥忍 (2003) 「唱歌が心と身体に及ぼす影響, 音楽に対する情動反応と生理的反応に関する実験」『岡山大学教育実践総合センター紀要』第3号, pp.29-33.
- 佐藤典子 (1996) 「刺激希求性と日常的音楽聴取行動との関係(1), 変化の欲求と音楽のジャンルの好悪」『日本性格心理学会大会発表論文集』第5号, pp.64-65.
- 東京大学医学部心療内科TEG研究会編 (2011)

- 『新版TEGⅡ活用事例集』金子書房, pp.10-21.
- 東條由季 (2008) 「大学生の音楽の嗜好, 性格特性との関係から」『臨床教育学研究』第33号, pp.22.
- 豊田弘司 (2010) 「大学生における自我構造, 自尊感情及び随伴経験の関係」『教育実践総合センター紀要』第9号, pp.1-5.
- 新山真弓, 野本立人, 浅川潔司 (2003) 「大学生のパーソナリティ特性が音楽評価に及ぼす影響」『実技教育研究』第17号, pp.41-47.
- 西村亜希子, 岩井正浩, 大平哲也 (2003) 「音楽聴取と唾液中コルチゾール, クロモグラニンAとの関連」『日本音楽療法学会誌』第3号, pp.150-156.
- 貫行子, 長田乾, 川上央 (2004) 「音楽聴取による脳波変動と気分変化, 音楽嗜好と性格特性の関連性」『情報処理学会研究報告』第57号, pp.35-40.
- 松井琴世, 小原依子, 松本和雄, 他 (2005) 「音楽聴取による生体反応の生理心理学的研究, 不安との関連を中心として」『臨床教育心理学研究』第31号, pp.1-11.
- 宮澤紀江 (2006) 「ベテラン保育士の自我状態およびストロークの与え方」『清泉女学院短期大学研究紀要』第25号, pp.1-16.
- 矢野正 (2010) 「小学生の自我状態の特徴と成績に関する検討」『実践学校教育研究』第12号, pp.40-47.
- 山下晃弘, 加藤敏, 阪上正巳, 他 (1996) 「集団歌唱療法の精神病理学的検討, コラージュの特質と社会技能訓練」『日本芸術療法学会誌』第27号, pp.63-68.
- 山本賢司, 伊賀富栄, 高橋幸子, 他 (1999) 「音楽聴取による情動変化について, 音楽専攻の有無による違いや聴取音楽による違いについて」『東海大学スポーツ医科学雑誌』第11号, pp.71-78.
- 吉岡明代, 板東浩, 吉岡稔人 (2004) 「音楽経験がエゴグラムの改善に与える影響」『日本音楽療法学会誌』第4号, pp.191-197.
- 渡辺恭子, 熊本庄二郎 (1998) 「音楽療法における楽曲を介した心理的内面表現について」『集団精神療法』第27号, pp.53-56.
- 渡辺恭子 (2012) 「統合失調症に対する12ヶ月間継続した音楽療法の効果」『日本音楽療法学会

誌』第12号, pp.32-39.

Hasen, C.H., Hansen, R.D. (1991) 「Constructing Personality and Social Reality Through Music, Individual Differences Among Fans of Pank and Heviy Metal」『Music Journal of Broadcast Electron Media』vol.35, pp.335-350